

論文内容要旨

論文題名

Effect of location of prosthodontic treatment with implant retained fixed dentures on treatment outcome as evaluated by oral health-related quality of life.

(少数歯欠損に対するインプラント治療効果-治療部位と口腔関連 QoL の関係-)

掲載雑誌名

Clinical Implant Dentistry and Related Research (投稿中)

歯科補綴学 原 真央子

内容要旨

背景：患者立脚型アウトカム評価において、OHRQoL (Oral Health Related Quality of Life) は、口腔疾患や、歯科治療の重要な指標であり、補綴歯科治療は臨床的にも統計的にも有意に、OHRQoLに大きな改善効果を及ぼすと言われている。OHRQoL の測定には一般的に Oral Health Impact Profile (OHIP)を使用している。我々は、これまでに OHIP を新しく4つのディメンジョンに分類し、患者の主訴との関連性を高め、より臨床判断を容易にするために、口腔機能、痛み、審美性、心理社会的影響とそれらを名付け様々な治療法に対する評価を行ってきた。しかしながら、少数歯欠損の固定式インプラント治療における、患者立脚型アウトカム評価は未だ少なく、治療部位別による検証も殆どなされていない。

目的：本研究では欠損部位による違いを明らかにするために、少数歯欠損に限定し、治療部位によるインプラント治療効果の違いを評価することを目的として、新たに作られた OHIP の4つのディメンジョンを用いて治療効果を検討した。

方法：上顎もしくは下顎の連続3歯以下の少数歯欠損の患者68人(男性24人、女性44人)平均年齢53.8(±10.8)を被験者とした。治療部位によって2つのグループに分け、前方群(32人)、後方群(36人)とした。OHIPサマリースコア、4つのディメンジョンである口腔機能、痛み、審美性、心理社会的影響に分けて評価を行った。OHRQoLの測定は、インプラント治療前と、最終補綴装置装着後約1か月後の合計2回採得した。

結果：術前では、審美性のディメンジョンに関して前方群が10.4(±5.1),

後方群が 7.2(± 3.8)であり統計学的有意差が認められた(P=0.01,ES=0.63).術後は,前方群後方群分類した場合においても,サマリースコア,すべてのディメンジョンスコアにおいて有意に改善していた(P<0.05).また治療部位別に比較すると,前方群,後方群間に統計学的有意差は認められなかった.術前後の OHIP スコアの変化量に関しては,前方群,後方群間で比較すると前方群で改善量が多い傾向があるが,有意差は認められなかった.また,欠損の最前方欠損歯と審美性のディメンジョンの変化量に関して回帰分析を行うと有意な関連があることがわかった(adjusted R²=0.073, P=0.015).欠損顎(上顎/下顎),欠損本数の影響を評価するためにそれらを独立変数に加え二次的に強制投入し回帰分析したところ,審美性の変化量は欠損顎(上顎/下顎),欠損本数に影響されず欠損の最前方欠損歯の影響を受けることが明らかとなった

結論:本研究により,インプラント治療介入は単に患者の OHRQoL を向上させるだけでなく,ディメンジョン解析を行ったことによって治療部位により患者の OHRQoL に及ぼす影響が異なることが明らかとなったことは特筆すべきである.